

【ポスターセッション】

**大学生向けの福祉教育実践における意義と課題**

—園芸・造園系学部における取組を通じて—

○ 南九州大学環境園芸学部 林 典生 (会員番号 5404)

キーワード3つ：合理的配慮、福祉教育、キャンパスソーシャルワーク

**1. 研究目的**

演者は本学会にて、A市内にある社会福祉の活動現場の協力をいただきながら、園芸・造園活動を通じた活動現場の当事者や地域住民を対象に実践してきた。を媒介にした大学生生活支援の実践研究を実施した。本年度は7年前にA市に大学が移転してから、演者が園芸・造園系学部の学生を対象にした地域にある社会資源を活用した福祉教育実践を行う中での意義と課題を明らかにすることで、今後の福祉教育実践に活かすことを目的とする。

**2. 研究の視点および方法**

本研究は演者が取り組んでいる大学生向けの福祉教育実践の中から、以下の2事例について詳細な記録およびインタビューを行い、整理した。

1つ目は演者が発達しょうがい当事者であり、地域にある成人発達しょうがい当事者会に運営メンバーとして参加するとともに、様々な団体・機関で発達しょうがい当事者としての語りを実践している状況があり、学生に発達しょうがい当事者の語りを聴く機会を設け、質問などを書いていただいて、質問内容のみ答えながら説明することで、当事者が抱える悩みなどや社会資源などの理解につとめるように実施した。

2つ目は演者がA市の社会福祉協議会の協力をいただいて、車椅子およびアイマスクを用いて、学生が作成した大きな寄せ植え鉢に植えている花の寄せ植えの管理体験することを通じて、ユニバーサルデザインについて理解する機会を設けるとともに、しょうがいの有無を問わずにできるガーデニングクラフト(ハーブせっけん)作成体験を実施しながら、参加者のいいところを見つけほめていく体験を実施した。

**3. 倫理的配慮**

この研究を実施するに当たり、南九州大学倫理委員会に審査を実施して、了承が得られたものである。この研究は個人情報保護の視点から、学生に成績評価に関係ないこと等の説明を行い、匿名化する等の個人情報の保護を行ったうえで、活動全体の参加記録の作成を行うとともに、行動観察、インタビュー、アンケート調査を実施した。

**4. 研究結果**

この2つの事例は多くの参加者より、大変勉強になったとの内容等の肯定的なコメントおよび感想文が多くみられた。その一例として、演者が発達しょうがい当事者として語りを聴く機会を設けた時の文章の中に、当事者の貴重な話を聴くことが出来てよかったとの

コメントや車いすやアイマスクを用いてしょうがい疑似体験を行う中で、事前に体験の方法を説明しているものの、話を聴くのと実際に体験するのは全く異なることが分かった等のコメントをいただいた。

問題点としてあげられるのはまず、教員が学生に一方向に教えていくといった教育と違い、教員と学生、さらには学生同士が双方向で学びあう形で実施する体験型の福祉教育を行う場合、しょうがい当事者である学生への合理的配慮が課題となった。つまり、誰もが見通しが付きやすい資料や実演を行わないと、しょうがい当事者の学生にとって理解するのが難しい現状があることが明らかになった。そのために演者は理解しやすい様に資料を作成しなおしてみたり、実演の手順を改良して試みるようになった。

さらに、発達しょうがい当事者の語りを聴いたのちに、しょうがい当事者である学生だけではなく、様々な学生よりキャンパスソーシャルワークも含む大学生の生活支援に関する相談も寄せられるようになる事例も見られた。

しかし、演者が以前本学会で発表している学内でもつながりにくい学生もおられるのも事実であり、教員単独で実施するだけではなく、大学全体による合理的配慮の仕組みづくりを進めていくなどの協力体制が不可欠であることが明らかになった。また、特定の対象者だけではなく、大学生全体にも知ってもらうことで普及啓発する必要性が明らかになり、わかりやすく理解していく方法を開発する必要があることが明らかになった。

また、大学外部との関係に置いて、大学生の声なき声を代弁できるおよび、声を上げることが出来るように支援環境の整備をしつづけていく必要がある。今までは様々な障害者支援事業所に演者が学生や学生と関係する地域住民の事例について相談しているが、今後、市役所・保健所やセルフヘルプグループなどのさらなる社会資源の開発・活用を目指し、困難事例の大学生支援に学内の支援ネットワークだけではなく、居場所づくりの形成等の学外の支援ネットワークにもつながっていける方法を見つけていきたい。

最後に、できれば大学生による当事者の視点による提案で大学内外においてしょうがいの有無を問わずに大学生活を過ごせる様に実施できる支援方策を探っていく必要がある。そのためにも、地域に存在する社会資源に対して、大学が地域の外にある意識を少しでも取り、大学が身近な存在になり、大学生の現状を知り連携が進めるためにも日常的に交流する仕組みを構築する必要がある。

## 5. 考察

本研究は演者が取り組んできた福祉教育実践に関する意義と問題点を明らかにするために、参加した学生のコメントおよび感想文などを分析した。その結果、多くの学生が演者の実践してきた福祉教育に理解を示しているが、合理的配慮を要する学生が福祉教育のコンテンツを理解していただくように改善していく様にキャンパスソーシャルワークも含む様々な支援が必要であることが明らかになり、さらなる改善を行う必要があることが明らかになった。